

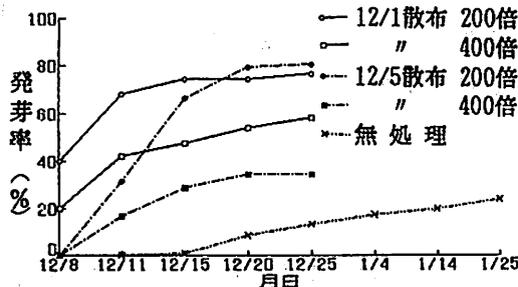
課題名	5 温州ミカンの施設栽培における高品質果実の多収生産技術	分類	①
	(4)温州ミカンの早期加温栽培における植物ホルモン、ビーエー液剤散布による発芽・着花促進		
試験研究年次	1~2年(完了)		
I 目的 温州ミカンの早期加温栽培において、加温後の発芽や着花促進のためのビーエー液剤の処理方法について検討し、安定多収技術確立に資する。			
II 試験方法 1 ビーエー液剤の散布時期及び濃度と加温後の生育 供試品種 かりん台2年生石塚早生(鉢植え) 試験場所 園芸研究所果樹圃場 処理方法 1年7月中旬にせん定して夏枝を発生させた樹を12月1日に最低温度20℃のガラス室に搬入した。ビーエー液剤は12月1日の加温開始直後及び加温5日目の12月5日に、それぞれ濃度200倍(150ppm)、400倍(75ppm)で散布した。 散布量は100cc/1樹で、1区1樹3反復とした。 2 ビーエー液剤処理に対する葉面散布剤の影響 供試品種 かりん台2年生宮川早生(鉢植え) 試験場所 園芸研究所果樹圃場 処理方法 2年7月中旬にせん定して夏枝を発生させた樹を11月27日に最低温度20℃のガラス室に搬入した。ビーエー液剤は加温開始直後に濃度200倍(150ppm)、400倍(75ppm)で散布を行い、それぞれビーエー液剤単用区と葉面散布剤のアミノメリット青(N:P:K=7:4:3)を500倍混用する区を設けた。混用区は加温5日後にも同じ濃度でアミノメリットの2回目散布を行った。 散布量は100cc/1樹で、1区1樹3反復とした。			
III 主要成果の概要 加温開始時にビーエー液剤を散布することにより発芽及び開花期が揃い、着花量を確保できる。また、葉面散布剤を混用すると着果率が高まり、安定生産が可能となる。 1 加温後の発芽や着花が不良となるおそれがある場合は、加温開始当日にビーエー液剤を400倍で散布すると着花が揃い、着花数も多くなる。遅れて散布すると発芽促進効果が劣り、着花数も少なくなる。 2 ビーエー液剤散布すると着花数は多くなるが、着果率が低下しやすいので葉面散布剤のアミノメリット液剤を500倍で混用して散布すると着果率が向上する。			

IV 主要成果の具体的データ

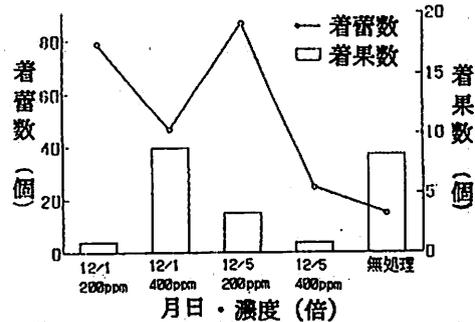
第1表 ビーエー液剤散布と加温後の着花（着蕾）数の推移（1年）

散布月日	ビーエー液剤散布濃度	着花（着蕾）数						満開月・日	開花期間
		12/20	25	30	1/4	14	25		
12/1	200倍	78	41	41	41	—	—	1.1	8日
12/1	400倍	47	44	46	46	—	—	1.3	9日
12/5	200倍	86	86	83	83	—	—	1.6	8日
12/5	400倍	24	25	24	24	—	—	1.9	10日
無処理	—	7	6	7	10	12	15	1.29	27日

注) 着花（着蕾）数は、結果母枝100節当たり



第1図 ビーエー液剤散布と加温後の発芽節率(1年)



第2図 ビーエー液剤散布と着蕾・着果数(1年)

第2表 ビーエー液剤散布における葉面散布剤アミノメリットの混用効果（2年）

ビーエー液剤散布濃度	アミノメリット散布濃度	発芽節率 %	結果母枝100節当たり			着果数	着果率 %	満開日	開花日数	
			新梢数	有葉花	直花					
200倍	—	69	3.4	40	46	86	3.4	4	12/29	6
200倍	500倍	54	5.0	25	31	56	7.5	13	12/31	7
400倍	—	47	5.1	15	41	56	8.2	15	12/31	7
400倍	500倍	39	1.0	8	44	52	9.9	19	1/2	9

注) 着果数は結果母枝100節当たり

V 成果の評価と取扱上の留意点

- 1 温州ミカンの早期加温栽培での発芽及び着花を安定させ、収量を確保する対策技術として利活用でき、植物生長調節剤使用基準並びにハウスミカン栽培暦に記載した。
- 2 使用に際しては濃度に注意し、生育を揃えるため樹冠全面散布とする。また、散布後は生理落果に注意し、温度管理に努める。

VI 今後の研究上の問題点

連年散布した場合の樹の生育への影響についての検討

VII 資料名

- 1 1~2年度福岡県農業総合試験場果樹関係試験成績書
- 2 元年度常緑果樹試験成績概要集（農林水産省編）